―忘れまい
あの日のこと・あの人のこと―

私の戦争体験記

ふじさわ・九条の会

はじめに

「ふじさわ・九条の会」では、憲法九条の大切さや会の活動の様子などを、三ヶ月に一度、ニュースとして発行し、会員の皆様方にお届けしてきました。しかし、ニュースの紙面だけでは、皆様の貴重な戦争体験等を、なかなか掲載することが出来ません。そこで、会員の皆様方の戦争体験を、小冊子にまとめて発行する事を企画いたしました。この度、会員の皆様方から、戦争体験、空襲体験、引き揚げ体験、さらに学童疎開体験等をお寄せ頂き、「私の戦争体験記」として発行する運びとなりました。こうした体験記が、会員の皆さまはもとより、多くの市民の皆さんに読んで頂き、平和の尊さ、わが国の憲法を守ることの大切さを知って頂ければ幸いです。

今回の小冊子では、十数人分しか掲載出来ませんでした。会員の皆様方の中には、これだけは、どうしても書き残しておきたいという貴重な戦争体験が、まだまだ、沢山あると思います。会としては、引続き、第二集、第三集も企画して行きたいと思います。その節には、是非、多くの皆様方のご協力をお願い致します。

二〇〇六年十一月

「ふじさわ・九条の会」

目次

私の戦争体験は終わっていない　岡村　孝子　1
安眠を奪う空襲・灰燼と化した横浜　斎藤　弘子　4
辛く、悲しく、ひもじい学童疎開　紺野　君子　8
私の満州引き上げ体験―八路軍に救われた開拓団　小林　麻須男　11
縁故疎開　坂本　敏江　13
戦争・命　池田　治子　15
私の戦争体験―軍部の謀略　台湾での入隊と帰国　川崎　健　18
焦土忘れず　向井　毬夫　20
ぼくの戦争体験―ひたすら「教育死」へ向かっていた　保坂　治男　22
北千島占守島の戦い　白崎　勇次郎　24
戦争中の思い出―空襲と疎開先で聞いた終戦玉音放送　小又　和夫　28
いじめられたアメリカ生まれの従兄　朦朧　泡　31
海の街で　33
友人・Nさんの話―東京大空襲　橋本　禎子　35
―絵手紙提供―　渡辺王子、岩田圭子、クマノミ、山崎正子

私の戦争体験は、終わっていない

岡村　孝子
（善行在住）

昭和の初め頃に生まれた私の幼い時代は、日露戦争以来二十年以上も戦争は無く、市民生活を謳歌する大正デモクヲシーの余韻もあってまだ平和な時代でした。

しかし私は知らなかったのですが、その頃既に、国粋思想を抱く陸軍と財閥の支配拡張が引き起こした2・26事件、満州事変など国家を中心にする思想統制が国民の間に浸透していたのです。

一九三七年、私の小学校二年生の時、日中戦争（日支事変）がはじまりました。その頃どういう手続きがあってか、小学生は家族ぐるみで、中国で「お国のために戦っている兵士」に、手紙や図画、缶詰や手ぬぐい、そして千人針などを詰めた「慰問袋」を送りました。

幼い頃から、私たちは「戦争をする国の国民は、お国のためにつくすべきである。神国日本の民として、天皇のために死ぬのが最高の道である」と教えられ、戦争が拡大するに連れてそれ一色になっていきました。

小学生の図画の時間には、男の子も、女の子も戦車や飛行機、爆弾、日の丸、兵隊さんの絵を描くようになっていました。

一九四一年、小学校六年生の十二月八日、「本八日未明、米国と戦闘状態に入れり」というラジオ放送を聞いた時、そばに居た父が「とうとうやったかー」と唇を噛んだのを憶えています。

米・英との貿易の仕事をしていた父は、相手の

力をよく知っていました。その後も度々「この戦争は負ける」という父を「お父様は非国民よ」となじったのを思い出します。

私たちは、女学校二年生（今の中二）の頃から教室で、軍服の裏地に兎の毛皮を縫い付ける作業などをしました。

二年生の終りから四年生の八月十五日、敗戦の日まで一年半ほど学徒勤労動員で、兵器を造る工場に通いました。やがて四年生の四月十日の夜の空襲で、私の家は全焼しました。二階の窓から見ていて、何時もと違ってＢ２９の爆音がどうもこちらに向ってくると思う間もなく、バシ、バシと何か割り竹で地面を叩くような音がしました。ハッとして父母と私と妹の四人は、ともかく身の回りの品だけ身につけて外にでました。体の弱い母は、やっと出来た十歳違いの妹を背負い、私は荷物を載せた自転車を引いて多摩川の河原を目指しました。後ろを振り返ると赤々とした焔が迫っていました。

その時、いきなり黒い影が近づき、自警団と思われる男たちが「男は逃げてはいかん」と言って父を取り囲み、引きたてるように連れ去りました。当時は、火叩きといって竹棒に縄をモップ状につけたもので、焼夷弾の火を消す訓練をしていましたが、そんなことは何の役にも立たなかったのです。

河原に着いて振り返ると、遠くの大きな工場の鉄骨が真っ赤に焼けただれ崩れ落ちるのが見えました。敵機はまだ去らず時々、焼夷弾らしく火の棒がシューッと多摩川の水にも落ちました。

朝が来て、私は一人自転車に乗って家に向かいました。どうやって父を探そうかと思いあぐねて灰燼に帰した家に近づくとそこに父が無言で立っていました。父が何も語らないのに、「あれから

何があったのですか」とは遂に聞くことが出来ませんでした。顔や頭に特別、怪我も無いものの、父を拉致する時の、男達の権力的な態度は今も恐ろしく思い出します。

その後、私たち一家は横浜のはずれに家を得てそこで敗戦の日をむかえましたが、そこから毎日工場に通っていました。級友の間に、覚悟の血判書が回ったりもしました。私たちは公式発表でしか戦況を知らされず、負けるという実感はまるでなかったのです。

家を焼かれ一切を失いましたが、家族四人は無事に生き延び、戦後の苦労は様々ありましたが、戦争被害者としてはましな方です。

一九四七年に新憲法が施行され、今後日本はもう戦争をすることはないと決まった時には、心から嬉しく思いました。戦争の空しさ、恐ろしさをくぐり抜けたとは言え、沖縄を除き人と人とが互いに殺し合う戦場に居なかった私たち大半に加害者としての反省は、殆ど無かったと思います。

それから六十年経た今、私たちは又、「国家、国益」という言葉にからめとられ、再び、言論抑圧がはじまっています。「何時でも戦争の出来る国」になろうとしています。

公安警察の介入逮捕ができる共謀罪、有事法制、国民保護法などなど、すでに法律そのものが、戦前に復帰するように見えます。

「お国のために死んだ人」を「国」が選び、「国」が顕彰する、そのどこが悪いのか、と居直って「国家権力」を復活させるのを見過ごしてよいのでしょうか。私たち日本人は、昭和の戦争の歴史から一体何を学んだのでしょうか。子供や孫たちに　何を伝えなければならないのでしょうか。それらを明らかにするまで私の戦争体験はまだ終わらないのです。

安眠を奪う空襲
灰燼と化した横浜

斎藤　弘子
（辻堂元町在住）

一九四四年も末になるとサイパン島を玉砕させ、空軍基地をつくったアメリカは本格的な本土空襲を始めました。毎晩真夜中に襲ってくる空襲に着替えて寝ることはできず、着のみ、着のままで、布団にもぐり、窮屈な格好で寝ていました。冬の寒い時期、セーターとモンペに靴下まではいて横になるのは、真夜中に必ずやってくる空襲に備えてのこと、オーバーを羽織って防空壕へ駆け込みます。もたもたしていると親に叱られ、警防団の怖いおじさんたちにも叱られてしまいます。灯火管制の敷かれた真っ暗闇のなかで、防空壕へと走りました。それが毎日の日常の生活、安眠など全く夢の世界です。

一九四五年五月二十九日、その日は珍しく朝から空襲で、女学校の姉も登校できず、家で母と三人空になっていた押入（最低限の必需品だけ残し後は皆疎開してあった）の下段に隠れていました。暫くするとあまりに外が騒がしいので姉が様子を見に行くなり、「中にいたら焼け死んでしまう、早く外に逃げなければ！」と大声で叫び、私たちは慌てて外に飛びだしました。そのとたんＢ２９の編隊が飛んできて、焼夷弾がバラバラと落ちて来たと見る間に、今居た私の家は、たちまち燃え上がり赤い炎に包まれて行きました。焼夷弾の次は急降下での機銃掃射の攻撃です。慌てて目の前の家の庇の下に逃げ込みました。目の前で、逃げ

遅れた赤ちゃんを半天で背負ったおばさんが火だるまになって燃えていました。その日は何度、目の前で、直ぐ後ろで、死んで行った人を見たでしょうか。

一号線に沿った国鉄の線路上には、燃え上がり、くすぶっている貨物が数珠繋ぎになって横浜駅の方まで連なり止まっていました。執拗に繰り返し、次々と追いかけてくるＢ２９の攻撃、雨霰の如く降り注ぐ焼夷弾と機銃掃射。隠れる場所のない避難民は燃えている貨車の下に何回も逃げ込み、ある時は神社へ、ある時は工場の壁にへばりついて機銃掃射から逃れながら、保土ヶ谷の山へ逃げて行きました。空は煙で夕方のように暗く、黒雲に覆われているような感じでした。貨車の荷物の燃える臭いは恐怖の中でも忘れられません。辺りに立ちこめたスルメの焼ける臭い、焼きリンゴのあの美味しそうな臭いは幼い私にとっては死の恐怖よりも強烈な印象でした。保土ヶ谷駅を過ぎた辺りから、私の記憶は途絶えています。あまりに凄まじい恐怖で朦朧としてしまったのか、人であふれた大きな何もない建物（Ｆ女学校の体育館）に着いた事だけは意識に有りますが、その後の様子は全く記憶にありません。小さな頭はもう何も受け入れられなかったのでしょう。

一時間あまりの空襲で横浜の街は焼き尽くされ、灰燼と化しました。残されたのは、野毛山と外人が多く住んでいた高級住宅地の山手、山下公園の一帯だけでした。私の家の焼け跡から今のみなとみらいの海（当時は三菱重工横浜造船所）までようく見渡せました。焼け野原の中に平沼の丸いガスタンクだけが残っていました。死者が少なくて済んだのは、昼間の空襲であったこと、東京よりも人口密度がかなり少なく、逃げる空間が多かったことによるのではないか

と想像されます。死亡は一万人程、Ｂ２９は本土で最高の五〇〇余機。Ｐ５１も一〇〇余機。六～九機の編隊での執拗な絨毯爆撃でした。紙と木でできている日本家屋の特徴を良く研究した上での空爆でした。

八月十五日になった時、幼い私が一番嬉しかったことは、もう空襲がない、夜安心して寝ることができるということでした。でも大人たちは大変でした。なにしろ一億玉砕を決心し、米軍と戦って死ぬつもりでいたのに、突然の敗戦です。鬼のような米軍が上陸してきたら、何をされるかわからない。日本兵だって、韓国や中国で、あらゆる蛮行を奮い、強姦から、虐殺などをやってきた事を考えたら、生きてはいられない。職場で言い含められたのか長女の姉は帰って来るなり「今日はもうみんな死ぬのよ！」とわめき散らして大変な有様でした。長姉の言っていることを冷静に受け止め、死を覚悟していた自分を思い出します。

幼い子どもの頭にまで「玉砕」という言葉を刷り込んでしまっていた時代の風潮を今は空恐ろしく思い出します。「生きて虜囚の辱めを受けず」の戦陣訓によってどれほど多くの住民が自ら命を絶って行ったことか。大人は「あの戦争では国に騙された」とよくいいます。騙された人はまた次にも騙されるのではないでしょうか。騙されないようにしっかりと自分の頭で考えなければと思います。『戦争の放棄』は、幼い日に死の淵からはい上がった者の責務のような気がします。

私の兄のように優しかった従兄弟は、海軍士官だったのに戦争を嫌って、戦艦ではなく輸送船を志願し、兵士、武器、食料などを運んでいました。当然の事ですが、爆撃され撃沈されました。船ごと東支那海に沈み、海の藻屑と消えました。

身近な人を亡くすことが、いかに悲しいこと

か。中国、朝鮮、アジアの人々の嘆き、悲しみ、怒り、恨みが身にしみます。この戦争で死んだ二〇〇〇万人余の人たちの命は、何度謝っても帰っては来ません。

私たち日本人はあの戦争の加害の歴史を忘れてはならないのだと思っています。

―渡辺王子―

辛く、悲しく、ひもじい学童疎開

紺野　君子
（鵠沼石上在住）

戦後六十一年、つれづれに語ることは出来ても、文章に表す事はとても重い課題である。それは六十一年過ぎた現在でも、幼い日の思い出の中で大きな位置を占めているからだろう。当時十歳にも満たない私にとって、学童疎開とは常に一緒だった家族との別れ、疎開先で何時も空腹を抱えたひもじさと辛さ、その上学童疎開中に出征をして行った父への不安、その、ひとこまひとこまを繋げて、今、記憶の糸を探ってみようと思う。

一九四五年三月十日、四月八日の東京大空襲を自宅近くの高台より眺めた時、最後の強制学童疎開に小学生だった私を、父は「お前だけは安全な処に移したい」と決心をした様だった。戦争も末期だったため、疎開先への子どもたちの移動は牛や馬を運ぶ貨車だった。

夜の赤羽駅で母と姉に見送られて出発をした。父は幼い私との別れが辛く、来てはくれなかった。灯りも無い貨車に揺られて真夜中に疎開先（群馬県新治村湯宿）に到着した。

山々に囲まれ一面の桑畑、そして利根川の流れの音、都会育ちの子どもたちにとって寂しさに堪え切れない光景だった。平和な時代であれば、そこは農閑期の湯治場である。

当時子どもたちの多くは寺などに収容されていたが、湯治場という事で両親は安心をしていた様だった。然し食料不足は例外に漏れず、常に空腹

感が付きまとうひもじい辛さは今も忘れる事が出来ない。

当時を想いだすと、総て食べられる物は口にしている。甘い蜜を求めて、つつじや野ばらの花、野草等、男児はトンボ、かえる、たにし等、現在の飽食の時代では考えられない子どもたちの姿がそこに在った。

東京に残った母と姉が、少しでも空腹の足しにと、お手玉に落花生を忍ばせ送ってくれた。それを知った教師から、私一人が呼び出され毎日少しずつ与えられた。実に惨めな思いで食べた事を記憶している。

ある日、農作物の害虫探りの作業で、かぼちゃや馬鈴薯を分けてもらい、とても嬉しかった事、また農家の人が食べるであろう小川の流れの中で、冷やしてあるトマトやきゅうり、西瓜への思いなどなど、食べ物に関することは現在も決して忘れる事が出来ないでいる。

疎開中に兵隊に獲られた父からは、幼い私宛に、ひらがなで書いてくれた葉書が届き、胸を躍らせて読んだ事も思い出す。また私からの葉書を兵舎の便所で泣きながら読んで居たと、戦後何度も父から聞かされた。父や母、当時の子どもたちも、それぞれの場で過酷な体験をした時代だった。

想えば、一九四五年四月から敗戦翌月の九月まで、非常に短い期間であったのに、寂しく辛くひもじいその時の記憶が次々に想い出され、当時の幼かった体験に涙してしまう。

その後、栄養失調の伏態で帰京した私が、戦後の食糧難の中で健康を取り戻す事に多くの年月を費やしたようだ。戦後幼かった私にとって、家族と共に暮らせる喜びで、その後の暮らしの苦労は私の記憶がうすい。

以上のような厳しい時代の体験を懐かしいむか

し語りにしてはいけない。二度と戦争をする国にしないため、子どもたちの未来に平和な時代を手渡していく責任が、戦争を体験した私には有る。そのために、憲法九条を守るその事に、学童疎開の体験が役にたっている確信を持ちたい。

―渡辺王子―

ー私の満州引き上げ体験ー

八路軍に救われた開拓団

小林　麻須男
（亀井野在住）

私は、満州生まれで、四才の時、ハルピン近郊の木蘭（ムーラン）というところで終戦を迎えた。両親は、長野県富士見村から満州に渡った開拓団で、九〇〇名くらいの開拓団員がいた。

終戦になって、分散して暮らすのは危険だということで、学校に全員が集結することになった。ところが、集結していた学校が武装した匪賊の集団に襲われ、開拓団に対する略奪と殺戮が始まった。開拓団には武器や鉄砲は一丁も無く、カマやナタや竹槍で武装したが、これではとても対抗出来ず、多数の死傷者が続出し、食料や医薬品などが匪賊に略奪された。私たち小さい子供は二階の教室に寝かされ布団をかぶって小さくなっていた。

母の話だと、大規模な略奪は二回起こり、二回目の襲撃の時は、匪賊は鉄砲まで使った大規模なもので、宿舎が包囲され、みんな、これで殺されてしまうのかと覚悟を決めたとのことである。しかし、その時、開拓団員の中から「現在この地を支配している中国の八路軍は、農民の味方だというから、日本人であっても助けてくれるかも知れない」という話が出され、「救援を頼んでみよう」ということになり、厳冬の夜道を馬橇に乗り、助けを求めに行ったとのことである。

当時、八路軍は、開拓団の近くの木蘭の街中に本部があり、総司令官は、後に中国の文化大革命で有名になった林彪将軍だったとのことであった。

みんな「どうなることか」と半信半疑だったが、林彪将軍に面会し救援を要請したところ、快く引き受けてくれたとのことである。馬橇に乗っていった団員が、一〇〇騎ほどの八路軍の兵隊を連れて帰って来た時には、「ああこれで助かったか」、とみんな涙を流して喜んだとのことであった。救援に駆けつけた八路軍は、威嚇射撃をし、たちまちにして匪賊を追い散らし、開拓団を救済してくれたとのことであった。

逃げ遅れ捕まった匪賊の一人が、「お前達は中国人なのに侵略者の味方をするのか」と言ったそうだが、八路軍の隊長は、「我々は、人民解放軍であり、働く労働者、農民の味方である。自国民であっても略奪は許されない」といって、匪賊達を追い払ってくれたそうである。

私は、小さかったので、詳しいことは分からなかったが、戦前、日本から満州に渡った開拓団に、中国人と言えども略奪行為は許されないといって追い散らし助けてくれた八路軍は実に道義の高い軍隊ではなかったかと思う。あの時、八路軍の救援が無かったら、四歳の私が、満州からこうして生きて帰ることは出来なかったろう。

引き揚げの体験は、その他、飢えや病気で大勢の人が亡くなるという悲しい出来事は数知れず、こうした悲惨な体験を語り継ぐことによって再び戦争を起こしてはならないと思う。

同時に、侵略の恨みを報復に変えずに、開拓団を救済してくれた軍隊があったという事も後世の人々に語り継ぐことも必要だと思う。

八路軍の道義の高さにひき比べ、今、靖国、憲法九条改悪を巡り、虐殺は無かったとか、侵略では無かったとか、自存自衛の戦争だった等と言う一部の人々の言動を聞くと、情けないと言うか、日本人として恥ずかしい限りである。

縁故疎開

坂本　敏江
（辻堂東海岸在住）

昭和二十年三月十日東京大空襲の真っ赤に燃える空は横浜からもただ事ではない状況を知ることができた。二ヶ月後の五月二十九日横浜大空襲へ向かい事態は急速に悪くなっていった。夜に多かった空襲は昼間も波状攻撃のように警戒警報・空襲警報がくり返されるようになっていった。

家族の安全を考えた父は、母と妹と私を故郷の金沢へ縁故疎開させることを決めた。戦時中のことゆえ、時刻通り発車しないとわかっていても正規の切符を求めるために駅には毎日長い行列が出来た。桜木町駅から線路下のガード添いに切符を買うために三日や四日行列するのは普通のこと。その間何回もの空襲のサイレンが鳴り低空飛行の敵機から機銃掃射を受けたのだ。父が家族の切符を手にすることが出来たのは行列に並んで五日目のことだった。一日の猶予もならずと、空襲の合間をぬって上野駅へ向かった私たちだったが、直江津経由金沢行の北陸線はいつ発車するとも不明なまま上野駅構内で二日待った。

やっと動き出した列車に乗り合わせた人々はみんな黙りこくっていたが、それぞれが大きな不安の塊を胸に抱えていた。途中何度も列車が停車するたびに、不安は「アーッ」という重たい溜息になり口を吐いた。やっと日本海側へ出た列車は駅に到着した。「ナーオエーツー」「ナーオエーツー」と間延びした駅員の声が聞こえた時、安心感とは裏腹に私は突然悲しみに襲われ大きな声で泣き出してしまった。少し長い停車に、乗客はいっ

せいにホームに走り出て水道ですすけた顔を洗い、おぼれそうになる迄水を飲んだ。

金沢の祖母の家に落ち着くと、父はまた何日もかけて横浜へ戻っていった。父が本当に横浜の家へたどり着けたかどうか知るすべもなかった。それがはっきりしたのは、五月二十九日横浜大空襲ですべてが焼けてしまいリュックサック姿でヨロヨロと金沢へたどり着いた父を迎えた時だった。

一日中警戒警報も空襲警報もない金沢はしずかすぎてかえって胸がドキドキするほど不安だった。

近くの国民学校の転校生となった私は、先生から「横浜から疎開してこられたお友だちです」と紹介されたのでその学校にいる間はみんなから「疎開っ子」と呼ばれた。一学期間だけしかいられなかったがとうとう次の学校に転校するまで本当の名前を呼んではもらえなかった。

―山崎正子―

戦争・命

池田　治子
（羽鳥在住）

六十一年前の八月十五日、あの日も暑かった。父に言われ、私たち兄弟三人が正座し玉音放送を聞いた。母は涙を拭っていた。夜になって戦争が終わったことを知った。もう防空壕に入らなくてもいい、電気をつけてもいいと母から言われ、何だかとても自由になった気持ちで家のまわりを走りまわっていたのを覚えている。

戦争末期は来る日も来る日も空襲で焼け野原を逃げまどい、毎日が防空壕での生活だった。学校は勉強どころではなく、「ふせろ！」の訓練ばかりだった。ある日学校の帰り道だったか、突然の轟音で機銃掃射にたおれた。私は人の間にはさまれて助かった。みんな死んでしまったのか夢中で逃げた。怖かった。本当に怖かった。しょう子ちゃん、しょう子とはそれっきり。今でもよく手をつないで、スキップしていた頃が夢に出てくる。食べるものは何もなく、一日一袋のカンパンがあればいい方で、口に入るものは何でも食べた。当時は口を動かすと何かを食べているのかと目を皿のようにして口元を見ていた。あの東京の焼け野原のあちこちで、ぼろをまとい裸足の子供たちがごみ箱をあさっているのをよく見かけた。小さな子は三歳位だっただろうか。あとで戦災孤児と知った。みんな何もなく食べるのに精一杯の毎日だった。あの子たちはその後どうしただろうかと、今でも思い出す。

私には戦争中から肌身離さず身につけていたお守りがある。袋は色褪せ、ほつれ、包み紙は茶色

に変色し、いまにもくずれてしまいそう。身体安全・弾丸よけ・観音像など、やっと判読できるお札が五枚入っている。あの空襲の最中、爆弾・機銃掃射と危険の中を守ってくれた。兄も同じように救急袋と一緒に身に着けていた。遠い満州の地で求めたものなのか・・・。今でも後生大事にしている。

戦後、静岡の田舎に引っ越したが、世の中全体がそうだったように私たち一家も貧乏のどん底の生活が続いた。父は村の工場で、母は慣れない百姓仕事に精を出し、私たち兄弟も真っ黒になって働いた。家の中は隙間風が入り、むしろを敷いたランプの生活だった。満州時代の貴重品、父の写真機、書物、母の宝石、客布団、次々と米にかえられていった。当時村の山の頂で母と見た村を一望した景色、真っ赤な夕日の美しさだった。父は偉人伝の話、母は西条八十の詩、映画のコーンプルチャンの話をよくしてくれた。

時折、母の祖母のところに遊びに行くと、祖母は仏壇の下に大切にしまってある息子たち（母の弟で四人とも戦死）の白木の箱から遺骨を取り出しては「これは間違いなくあの子だ」と言いながら愛しそうになでていた。下二人の叔父の白木の箱には誰のものともわからない遺骨が少し入っていた。それでも大事に大事に愛しんで撫でていた。一番下の叔父は乗船間際だったのか水兵服で母に別れをつげに来たのを覚えている。長いこと手を取り合って話していた。四人の息子の戦死。祖母は戦後どんな思いで生きたのだろうか。亡くなるまで陰膳を供えていた。

人は戦争するために生れて来たのではない。戦争は人の心も体も全て焼き尽くす。原爆で亡くなった幾万の人々、そしていまだに癒えぬ傷を負い苦しんでいる多くの人々がいる。南方の激戦地で

最後まで戦い散った兵士、極寒の地シベリアの凍土の中に埋もれたままの兵士。異国の地でいまだに日本の土に帰れず野晒しのまま放置された二百万ともいわれている遺骨。この現実をしっかり見据えて欲しい。

戦後は終わっていない。ある作家が女子大学で教鞭をとっていたころ、五十名の学生に、「日本と戦争をしなかった国はどこか」とアンケート調査したところ十二、三名が「アメリカ」と答えたという。歴史教育の貧弱さか、知ろうとしない世代が多くなったのか。戦争は過去のものではなく、今もそれぞれに引きずって生きていることを語り継いでいかなければならない。

私は我が頭上を昼夜の別なく低空飛行訓練する米軍爆撃機の爆音のたびに瞬時にあの時がよみがえり、恐怖といかりに震える。

敗戦国なるが故にこの爆音撒き散らしに耐えるしかないのかと！

最後に、原爆による胎内被曝者の声を聞いて欲しい。

「生まれた時から偏見といじめに会いながら生きて来て楽しいことは一つもなかった。

戦争は憎か！

原爆は憎か！

アメリカが憎か！

自分のようなもん、二度とつくってもらいたくなか！」

この悲痛な叫びを日本人は心にとめ、忘れてはならない。日本国憲法を守り、平和外交によるすばらしい日本を後世に残していきたいと願っている。二度と戦争はしてはならない。

私の戦争体験

―軍部の謀略・台湾での入隊と帰国―

川崎　健

（鵠沼藤が谷在住）

私にとっての戦争とは、一九三一年の満州事変に始まり、一九四五年の敗戦とともに終わる「十五年戦争」から、戦後の時代にかけてである。父親が日本人小学校の教師をしていたので、私は一九二八年に中国南部の福建省福州市で生まれ、一九三七年に台湾に移り、敗戦後、一九四六年に日本に引き揚げた。

最初の戦争体験は、一九三二年、四歳の時である。当時日本の軍部は、中国大陸侵略のきっかけを作るため、さまざまな策動を行っていた。その一つが福州事件である。軍部が中国人に金を与えて日本人家族を襲わせたのである。最初は、私の一家が狙われたが、家族が多い（当時7人）というので変更され、近所の山口さんという父と同じ学校の教師の一家（夫婦と乳飲み子）が襲われた。夫婦が殺害され、乳飲み子が残された。先生が私の家の玄関のドアまでたどり着いて、力尽きて倒れていた姿は、いまでも目に焼き付いている。乳飲み子は丁度同じ歳の男の児がいた私の母が預かった。私の家族は九死に一生を得た。「待ってました」とばかりに、海軍陸戦隊（米軍の海兵隊と同じ）が、「邦人保護」のために福州市内に展開した。三〇〇人の日本人居留民は、しばらく台湾に「避難」した。

第二の戦争体験は、軍役である。戦局が厳しくなって、台湾では、学生は軍事教練を受けているので即戦力であるとして、私たちは一九四五年の三月に特別召集された。当時、旧制台北高等学校一年生であった私は、十七歳になったばかりで二

等兵になった。重機関銃中隊に配属され、射撃がうまかったので、銃手となった。ともかく、ひもじかった。台湾の北西海岸で、米軍の上陸を待った。マッカーサー将軍が方針を変更して沖縄上陸に切り替えたため、ここでも命拾いした。しかし、当時山中に居たので、一九四五年九月の除隊間際に重いマラリアに感染し、生死の間をさまよった。幸い奇跡的にキニーネ（マラリアの特効薬）が入手でき、一命をとりとめたが、その後数年発作に苦しんだ。

台北高校に帰ってしばらくして、妙な中国人が訪ねてきた。日本に帰っても餓死者続出だから、ジャンクに乗って機関銃を撃たないか、という話である。給料は抜群、酒は飲み放題、というのである。要するに、海賊にならないかということである。数日考えてから断った。

一九四六年四月にリバティ型という米軍の上陸用舟艇に貨物同然に乗せられて強制引き揚げ、帰国した。すし詰めで、身体を横たえるだけのスペースもなく、食事は劣悪で、船中で何人もの死者が出て、水葬に立ち会った。

問題はむしろ帰国後にあった。私たちは祖父母の代から五十年間台湾に住んでいたので、内地（日本）とは無縁の「台湾人」であった。リュックサック一つで帰国しても、祖国は異国であり、一家六人行くところもない有様であった。私は高等学校三年生として山形に行ったが、マラリアの発作が起き、金もなく食物もなく、数日間何も食べないで下宿の畳の上で横になって、このまま餓死を待つしかないのかなと、次第に薄れいく意識の中で思ったこともあった。

私の青春時代はこのように無惨なもので、楽しいことはあまりなく、苦しきことのみ多かりき、であった。戦争とは、このようなものである。

焦土忘れず

向井　毬夫
（辻堂在住）

空襲警報解除の空の飛行機雲
　明日もかくやと見しもはるけし
完膚なき焦土に炊ぐ火を焚きし夕
　憶うもいつしか淡き
熱に溶けし水道管より迸る水に
　虹たつ焦土のまひる
防火用水にその身浸せど焙られし
　級友ありきのちの歳月
焼け跡の焦げし臭気を古希過ぎて
　ふとも思うに派兵の怪し
都市高層に光満つるも忘れめや
　燃え燻ぶりし歩道の屍
焼け跡の焼け棒杭の銀杏樹の
　半世紀いま黄葉を噴きいる
さながらに占領日本巌めきビルの
　あわいに見えくる巨艦
噂なるＧＩベビーの碑を尋ぬ
　薄幸の子の九百の霊
薄幸の子の碑拝むと丘ゆくに
　看しなるべし昼の静けさ

昭和二十年五月十九日、サイパン島を出発したＢ２９五十七機が、Ｐ５１百一機の護衛をうけて横浜を、午前九時三十三分から空襲した。一時間八分の間に大型焼夷弾と小型合わせて三万余個。戦後の調査では一万名の死者があったと考えられている。爆弾で前もって市民の退路を塞がれた焼死の山を実際に私の目は各所で見た。みなとみら

いの超現代的な風景から想像もできないが、今でもその体験はふっと体感するほどの現実感である。

この十首の短歌とコメントは、平成十六年「短歌新聞社」発行の『昭和の記録・歌集八月十五日』からの重出である。

五月二十九日の朝、私は戸塚の知人の家にいた。当時県立二中の四年生、家族は静岡に疎開し、当日は午後から勤労動員で横浜駅裏の桜鋼鉄に行く筈だった。突然空襲警報がなり、やがて物凄い数のB29が爆弾投下、白い煙が上空に、やがて黒煙が空に広がった。空襲後、生家や親戚、友人たちが心配で、第一国道を保土ケ谷駅方面にひたすら歩いた。駅前を過ぎてわずか、様相がすっかり変わり、街路の電柱が蝋燭のようにてっ辺から火を噴いている。あたり一面煙で、異様な刺激臭である。燃えていない家はなく、高島駅ちかくに突然海が見え陽光にキラキラ光っている。横浜駅などのビルは、中味は燃えて外側だけ。

今の京浜「神奈川」駅のそばの青本橋は計画的に集中して爆弾を投下させた地点だそうだが、真っ黒にコークスのようになった死骸たちは、男女の違いも分からないほど。もっとも悲惨だったのは、今の東横線反町駅のちかくの泉川という今はない川の中、幾段にも積み重なって死んでいる。水を求めて火に追われ死んだものか。目を閉じれば今でも脳裏に浮かぶのである。

空襲の死屍のあまたに遭いしわが胸に
沁み入る「九条」の声

ひたすら「教育死」へ向かっていた

保坂　治男
（高倉在住）

八月になって、新聞・テレビが戦争のことをたくさん知らせている。その中で、ある人が、戦争で死んだ人たちのことを「教育死だ」と言ったのに、深い共感をもった。

一九四四年（昭和十九年）三月二十五日、僕は東京都新宿区立富久小学校を卒業した。

「卒業記念品授与」とアナウンスされると「ハイッ」と答えて、ぼくは、卒業生を代表して、ズッシリ重い箱をうやうやしく受け取った。

「中身はみんなの名前を彫ったハンコだ。落とさないように受け取るんだぞ」と担任の先生に言われていたので、両手で捧げ持ちながら階段を後ろ向きに下りるとき、ふらついたらどうしようとか、みんなの印章がばらばらに散らばるのを想像して、前の晩は、おちおち眠れなかった。このハンコは、やがて「陸軍幼年学校・少年航空兵・少年戦車兵・少年通信兵」などへの志願手続きに使われることになった。

卒業式が終わって教室に入った。佐渡ヶ島出身、色白長身の児玉先生が、いま想うと、いつもの優しい眼差しで、ぼくらをじっと見渡して、言った。

「もう君たちとお別れだね。先生は、最後の言葉は黒板に書いて、お別れすることにする。」

ぼくたちは、手をぎゅっと握りしめて、いつものように端正な字ですらすらと書かれる先生の板

書の文字を見守った。「死、生、観、・・・て、先生は、書きました。人生観・・て書いたんじゃないよね。アメリカ兵と戦って、どのように立派に勇ましく死ぬかの考えを、死生観というんです。」

この後、先生はどんな言葉を続けて終わったのか、その後いくら思い出そうと試みても思い出せない。先生は今でも慕っているぼくの、多少美化した印象になるのかも知れないけれど、四・五・六年と三年間持ち上がってくれた児玉先生は、長く教室に残って、ぼくたちを見つめることはしなかったように思う。

「勝ちぬくぼくら少国民」

（当時はやった唄）

勝ちぬくぼくら少国民
天皇陛下の御為に
死ねと教えた父母の
赤い血潮を受け継いで
心に決死の白だすき
かけて勇んで突撃だ

きょう増産の帰り道
みんなで摘んだ花束を
英霊室に供えたら
次は君らだ分かったか
しっかりやれよ頼んだと
胸に響いた神の声

北千島占守島（しゅむしゅ）の戦い

白崎　勇次郎
（大庭在住）

千島列島は、北海道北東端と、旧ソ連領カムチャッカ半島南端との海上に、約千二百kmに渡って飛び石状に並ぶ弧状の列島である。名のある島は十五ほどあるが、カムチャッカに近い四島の占守、幌筵、阿頼渡、志林規を北千島と呼ばれていた。

北洋特有の濃霧と強風が吹き荒れて、立木はなく高山植物と這え松の群れが海岸近くまで伸びていた。漁期の五月から九月には一万数千人の季節労働者で賑わったが、越冬する人は少なかった。

私は太平洋戦争の末期、約一年半を北海派遣軍に編入され、対空無線通信隊の通信兵として、生涯忘れることのできない日々を北千島で過ごした。

私が着任当時は陸軍四万、海軍五千の精鋭部隊がいた。航空隊も双発軽爆撃機、急降下爆撃隊、司令部偵察機、隼戦闘機と海軍の艦上攻撃機が二百機近く駐屯していたが、間もなく本土決戦に備えて続々北海道に引き揚げ、航空機で残ったのは隼十機と艦上攻撃機数機だけとなってしまった。

夜の点呼時に各兵舎から聞こえる士気高揚の軍歌『海ゆかば』も、もの悲しいしらべとなって北の海へ消えてゆく毎日だった。

占守島へ着いた頃はまだ通信室が地上に露出していたので空襲の度に狙われていた。敵機来襲の警報が鳴ると室内は三人の通信兵を残し他は地下壕に避難する。

残された通信兵は一本づつ与えられる恩賜の煙草を深々と吸う。天皇家の紋章である菊の花入りの有り難い煙草を吸えば、名誉の戦死を遂げても止むを得ないと諦めがつく。敵機の爆音が近づき迎え撃つ友軍の高射砲の音も聞こえてきた。

驟雨が降り注ぐような音を立て爆弾が落ちてきた。人馬殺傷弾が建物に命中すれば室内には鋭い弾片が八方に散る。戦闘中は我が身の危険を顧みることは許されない。通信機にしがみつき隼機からの送信に耳をそばだて、電鍵を握りしめる。

爆音が遠ざかり高射砲の発射音も消えた。ホッとして室内を見回すと、二人の戦友が机上に凭れ掛かっていた。うんもすんもなく呆気ない最後だった。

八月十五日天皇の降伏宣言放送があった直後、北千島派遣軍最高指揮官だった九十二師団長、堤中将が次のような宣言をした。

「日本帝国は降伏したが、我が帝国陸軍に降伏の二文字はない。よって我々は本日ここに日本帝国から独立し、幌延王国を建設した。王国には女性は存在しないから永久抗戦は不可能成るも、最後の一兵まで戦い抜く覚悟なり。幌筵は不沈戦艦である。」

占守島の兵士達は難解の降伏文書よりも痛快な師団長宣言を歓迎した。一度は戦争が終わったから内地に帰れると思った、北千島の兵達はソ連軍との決戦に備えて立ち上がった。

夕方鮮やかな日の丸を前後につけた胴衣を着用した、海軍機銃隊の一団が宿舎を訪れた。丘の上に速射砲（戦車砲）を据え付けて、進入してくるソ連軍戦車に一泡吹かせてくれると意気軒昂である。南方戦線では友軍がこの砲の撤甲弾で、米軍戦車をさんざんやっつけたと豪快に笑っていた。

船が慌てて出航しマッチを受領するのを忘れたから、少しわけてくれないかと云う。海軍さんはバカにでっかい日の丸をつけると感心すると、海に浮かんだとき遠くからでも発見できるよう、海軍の標識は派手なんだという。「隼機の姿がないがどうしたのか」と聞くから「北海道へ逃げた」と答えると、「海軍もお偉いさんは内火艇で、安全地帯へ行ってしまった。役立たずはいない方が良い。足手まどいだから」と笑っていた。日本刀を腰に差し、新撰組を彷彿させる海軍の古参下士官は、マッチのお礼だと、陸軍の兵隊では手に入らないウイスキーの瓶を置いて引き揚げた。

三日後、幌筵王国軍はポツダム宣言に基づき占守島を占領しに来た旧ソ連兵を乗せた艦船を砲撃で撃沈した。ポツダム宣言を受諾した日本がまだ手向かうとは何事かとばかりに、海から艦砲射撃、空からは爆弾投下で、占守島の日本兵は釘付け状態となった。数時間後砲撃が止むと、ヨーロッパ戦線を席巻したソ連軍重戦車の大群が攻めてきた。

上陸地点の日本軍守備隊を蹴散らし占守島の飛行場目指して進撃してきた。

砲撃の間隙をついての海軍特攻機の滑走が始まっていた。死地に向かう海軍少年兵はまだ童顔だった。見送る兵達に軽く会釈し平然と飛び立った。ソ進軍艦船は目の前である、体当たりまで数分間しかない。白いマフラーと童顔の横顔がいつまでも私の眼底から消えなかった。

私は洞宮内の通信所で二発の手榴弾を通信機の前に並べ、いよいよ最後のときと、北海道帯広の本隊宛打電した。

ツウシンキザイ、ハカイジュンビカンリョウス。コレヨリホヘイブタイニゴウリュウ、サイゴノト

ツゲキヲカンコウセントス。ハケンタイインイチドウ、シキマスマスサカン、ソコクノタメニイチメイヲササグ、ユウキュウノタイギニイキルカクゴナリ。

送信後直ちに通信所を閉鎖して敵戦車を迎え撃つべく火炎瓶を握りしめた。

飛行場前面に掘られた蛸壺の中でソ連軍戦車の来るのを今か今かと待っていた。今度こそ天皇陛下に命を捧げるときがきたと自分に言い聞かせながら、ソ連軍戦車を待ったが戦車は来なかった。飛行場突入を前にして停戦となったのである。

教育隊時代同期だった占守島残留S分隊長に、「ソ連軍戦車が飛行場に姿を見せたら俺がいの一番に飛び出す」と約束していたので、停戦命令が一時間遅れたら私は占守島で死んでいた。

—岩田圭子—

戦争中の思い出

空襲と疎開先で聞いた終戦玉音放送

小又　和夫
（相模原市在住）

私は、昭和十一年に東京の荻窪で三男として生まれ育ちました。物心がついた時には満州事変、シナ事変、そして大東亜戦争という言葉が、耳に入っておりました。昭和十八年に国民学校（小学校）に入学しました。父は、中島飛行機という軍需産業の先端を行く企業の下請けの工場を営んでいたので、私の家族と近所の軍人の家には、食料品が（こんな物までもと思われる贅沢品も含めて）軍部から特別配給で、豊富に支給されておりました。

今考えてみれば、近隣諸国や日本国民からあらゆる物資を供出させて、「贅沢は敵だ。ほしがりません勝つまでは」、「お国の為に」という愛国心によって、消費物資が軍の中枢に贅沢に集められていたことは、現在の北朝鮮以上でした。他国の侵略、強制連行、強制労働、従軍慰安婦もありました。私の幼年期、少年期は現在の朝鮮半島の人たちや中国の人たちを朝鮮人、支那人、ちゃんころとみくびった世の中になっておりました。

昭和十九年になってから、米軍機が飛来するようになってきました。夏過ぎまではあまり爆弾を投下されずにいましたが、上空から写真を撮っているとの事で、敵のゆとりを感じるとともに、日本の戦闘機の迎撃もなく、時たま敵機に向けて打つ高射砲も届かず不安を覚えました。

秋が深まるにつれて、B29という大きな爆撃機が本土を来襲するようになり被害が出始めてき

ました。

十一月になってから米軍機の空襲頻度が多くなってきました。防空壕に隠れた時にあまり遠くないところに爆弾が落ちたらしく、ズシーンという音と共に防空壕が大きく揺さぶられ、その恐ろしさは今でも肌身に覚えています。

年が明けて昭和二十年になると真夜中の空襲が多くなってきました。真冬の熟睡している時に不気味なサイレンの音、親の叫び声と共に起上がる苦しさは、今でも忘れません。それからが命がけの避難になるのです。敵機B29が投下するのは焼夷弾で、燃えやすい日本の建物を延焼させる狙いでした。家族は身支度を整える暇もなく、二階の物干し場に駆け上がり、高い所から、今、どのあたりがやられているかを見ておりました。中野だ、高円寺だ、燃える炎が夜空を赤々と染めていました。敵機がこっちに向かって来たらと思うとぞっとしました。

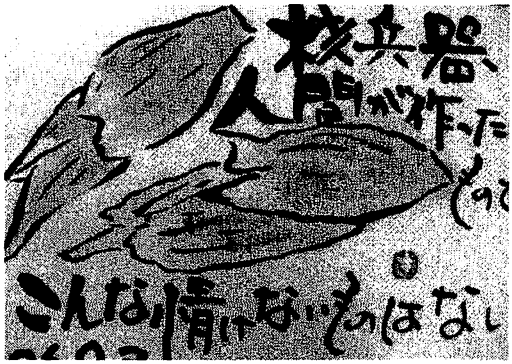
その後間もなく、学校で集団疎開に行くことになり、家族と別れて、長野県の別所温泉に行きました。最初の旅館には前年疎開してきた五年生六年生も一緒だったので、二年生の身の私は、みんなに大変かわいがってもらいまいた。二ヶ月くらい経ってから私たちの宿泊場所は、大きなホテルに替わりました。学校の生徒はほぼ全員が一緒になりました。しかし、代わる毎に食事が少なくなって行くように感じました。栄養失調による下痢のため、少ない食料も十分消化されず、毎日がだるく、意外な重労働にも耐えねばなりませんでした。家族のことを思うと心が苦しくなりました。早く、うちに帰って食べ物を沢山食べたいと思いました。空腹とシラミによる体の痒さ・だるさは、毎日温泉に入って居ても苦痛を覚えておりました。何時までこんな暮らしが続くのかと思う苦しみの

生活でした。

暑い夏の日が続きました。戦局を男の先生が食事の時に全員に知らせてくれました。その先生は、日本は絶対に勝つと言っておりました。ある夕食後、その先生が広島に新型爆弾が投下されたことを話し、その威力を簡単に説明しました。

それから一週間すぎて、昼間、生徒全員がロビーに集められました。天皇陛下の大事なお言葉があるということで、全員、ラジオに向かって直立不動で聞き入りました。私は、ラジオの音声が聞きづらく、意味が分かりませんでした。私の目の前に立っている友の首筋に大きなシラミが這ってのぼっていました。

天皇陛下のお話が終わり、女の先生は泣いておりました。日本が負け、降伏した事を知りました。内心、やっぱりそうか、ほっとした思いでした。



―渡辺王子―

いじめられた アメリカ生まれの従兄

朦朧　泡
（大庭在住）

私の従兄はアメリカ生まれのハーフでした。私と従兄は、あの戦争が始まった時、学校は別でしたが、小学校六年生でした。「鬼畜米英」「御真影」に拝礼、紫の袱紗に包まれた教育勅語、何かの時に読み上げる校長、旧制中学時代には軍人勅諭まで。学校では現役の配属将校が巾を利かせ、勤労動員にまわされました。我々に配給された少しばかりの給食用の物資は、彼らがピンハネ。そんなとき、従兄はヨーロッパ人に似ているというので、イジメが始まりました。

「何で？」私は、五～六才頃から、生まれた所が少し違うだけで「皇太子と私とどこが違うのかな？」と考えていましたが、私は腹が立って仕方がありませんでした。「本当にアメリカやイギリスは、悪い国なのだろうか」

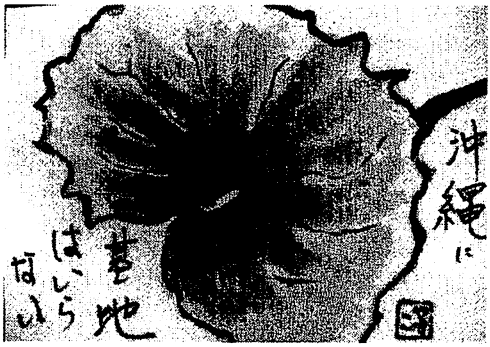
私は従兄に言いました。「アメリカに行こう」子供心に計画をたて、フィリピン、マレーシア、ビルマ、インド、オーストラリアそして彼の国へ。ある輸送船に乗る計画をたて、月島まで行きましたが、手配の船は前日行ってしまい、計画を成功させることは出来ませんでした。

そのころＢ２９の空襲は次第に激しさを増し、あの焼夷弾が「ザーア」と言う音を立てて落ちてきました。夜空は赤く燃え上がり、遠くがとても近く見え、空からトタンが焼夷弾と共に舞い落ちてきました。

八月十五日、「やれやれ、これで終わったか」二人で、まだ虱だらけの服を脱ぎ、顔を見合わせました。おじもおばも、日本が戦争に負けることを知っていたと思います。私もそう思っていました。英語の教師が、あの戦の最中に「白鳥の湖」を手巻きの蓄音機で聞かせてくれたことが忘れられません。

戦争は、人々の生活を奪い、無差別に殺します。今も中東では、かつてのヒットラーや日本の軍国主義者のように、人々を言葉のあやで欺き、人間の人間らしさを奪い、奴隷の様な状態に陥れています。このような戦争は、一日も早く止めさせなければなりません。現在の日本の憲法九条、教育基本法は、日本の、そして世界の宝です。平和とデモクラシーの根っ子です。

再び「御真影」を遙拝させられ、事あるたびに教育勅語や軍人勅諭を聞かされ、「鬼畜米英」を叫び立てるような時代の到来など、考えただけでも怒りがこみ上げてきます。



ークマノミー

海の街で

橋本　禎子
（大庭在住）

私の住んでいたのは、小浜市。河の傍で終戦を迎えた。空襲警報はよく鳴ったが、実害はほとんどなく、二十年の七月頃より機銃掃射が時々あり、その頃になると海軍の艦艇が若狭湾に数隻入り、物々しく木で覆われていた。お寺の多い所で、駅前だけでも十軒以上もあった。そのお寺に水兵がみな合宿していた。

私の借りていた部屋の主は、そのころ三家族に部屋を貸していたが・・。小学生の私はどうしてそうなったか不明だった。とにかく家主の彼女は、夫をアメリカで失っていた（盲腸手術で）。息子は全部、士官だったり、落下傘部隊だったりでした。末の息子は、北大の特待生だったが、特攻隊に行っていた。

忘れもしない二十年七月二十四日、彼は「我が墓標雲の峰」と言って特攻隊として散った。それに対し、大の大人達が寄って、酒盛りをして「目出度い、メデタイ、お祝いだ」と言って、たった一人の母である家主の家に寄り合ってさわいだ。子供心に「何で？、何でメデタイの？、ほんとうは悲しいのに。男の人ってわからない。男の人って愛情はあるのかな？」とつくづく思ったものである。皆の前ではニコニコ笑っていた家主の彼女が、階段の影で、声を忍んで泣いていたのを見て、心から悲しくなった。男の人が騒ぐ中で、ほんとに胸が痛くなったのを思い出す。

八月に入って水兵の騒ぐ声を聞いて密かに笑っていた彼女だったが・・、八月十四日の夜、初め

て防空壕に入った。

「やっと防空壕が出来たのよ」と言った彼女の声は澄んでいたが、翌日敗戦の放送があってから、私たちが田舎に帰るまで姿をみせなかった。

終戦と同時に順々に我が家の兄たちが家に帰り、家主の二人の兄たちも帰ってきた。しかし、「あの家主の末の息子さんが、何故、七月二十四日、一ヶ月もたたない前に逝ってしまわなければならなかったのか？」「日本は軍だけが人間だったのか？」「国民の弱者は人間と思われていなかったのか？」と思った。

戦争は負けるよ・・と家で話した人が、あくる日は特高に連れて行かれたりした。

毎朝、非常食を背負って、「夜には会えないかもしれない」と語り合って別れたのも思い出す。空襲警報だけは、まめに鳴って、終戦の時は、これでゆっくり眠れる・・と心から思った事である。

―渡辺王子―

友人・Nさんの話

―東京大空襲―

橋本　禎子

ある夜、友人・Nさんが私に、「今まで誰にも話したことはなかった。何か口を開くと、あの人間の極限状態の事を表現しきれるものではなし、何か嘘っぽく思えてならない」と言いながら話してくれました。

以下、友人・Nさんを私として・・・・・・

私は両親に早く死に別れ、姉が三才の私を連れて結婚したのよ。姉の夫が父で、姉が母だったの。三月十日のあの東京大空襲の日、私は女学生で、木場の義父（兄）の家に住んでいました。あの夜は、一度警戒解除になって寝床に横になったばかりだった。再び警戒警報が鳴ると同時に、ものすごい爆音がして外が赤くなった。爆弾が先か、焼夷弾が先か、飛行機が先か、そんな判別のつく暇もなく、あっという間に炎が上がった。姉は六歳の長女を連れ、私は三歳の甥を負ぶって一緒に家をでた。でもすぐにはぐれ、しばらくは姉の名を呼んでみたが、業火の音に消されてしまった。防空壕に行って見たが、どこも満員で、しかも火が入ったので生きている人がいない。あの空襲は大きく円を描いて中を十文字に爆弾と焼夷弾を落としたの。そんなの知らないから、もう、必死で逃げた。炎の轟音と泣き叫ぶ声、名を呼ぶ声、大勢の人波に押されて歩く道は、みな死んだ人の上を歩いて逃げたのよ。熱くて、防火用水に入りたくてもどの防火用水にも人が入っていて、しかもしっかり抱き合ったまま死んでいるのよ。全く死の山の中

を逃げまどって、誰かが私の手を引っぱって、どこをどう行ったのか、広場のようなところに数人で辿り着いた時は、ほっとして、ああ生きていると思ったの。

もう地獄の様な炎も遠く、川が流れていて、小舟が岸に繋いであった。恐怖で狂った頭の中で、空ではじく炎は花火の様に美しかった。可笑しいでしょう。生命からがら逃げてきて、知らない人たちと無事を確かめ合って。でも、炎は遠いのに、いきなり舟が燃えだし、皆で水をかけたの。私たちも熱くてたまらないので、川に入ったり水をかけたりしたの。でも、水を浴びると、凍えるように寒くてがたがたするし、すぐ又乾いて熱くなる、を繰り返し夜が明けたの。炎が少し下火になり、空襲も終わって、第一避難所に行くと焼けて何もない。第二避難所へ行く。近所の人の顔を見た時は、本当に涙が出る程嬉しかった。でも姉がいない、姉は病院に行ったと言う。病院になっている所に行くと、昏睡状態の姉が包帯に包まれていた。姉は六歳の長女がオシッコをしたいというので外に出たとき、長女は、姉の目の前で焼夷弾の直撃を受け即死。姉も大火傷を負い、近所の人に運ばれて行ったとの事を聞く。目の前の姉は、生きているとも思えない位だったが、義兄であり義父でもある彼の為に絶対回復させたい、完治させたい、と夢中で介護した記憶がある。

あの頃、医薬品は、全部軍の徴用になって薬なんて殆どないのに、よく治ったと思うわ。下町って、良いのよ。何も無いのに皆で助け合って。今思うと奇跡としか思えない。

口を閉ざした友人は、夢の中の様な顔をしていた。その友も、二年前、癌で逝った。

ふじさわ・九条の会

発行　ふじさわ・九条の会（ニュース担当編集）

連絡先　藤沢市亀井野1371-5　小林　0466-44-0375